

治的なことを話し、また質問もするので、女性も終戦後、こんなに政治に関心を持つようになったのかと感心した。ところで、ソ連での感想を聞かれたので、ここぞとばかりに小生の意見を述べ、現地の実情、特にソ連住民の生活環境の劣悪さと、親子でも本当のことを話せない密告制度等、精神的重圧下の状況を話し、私も貧乏育ちゆえ、ある程度共産党に興味を持っていたが、「ソ連留学」のおかげで共産党は大嫌いになり、もちろん入党は取りやめたと言ったら、「それですか」とのことであった。後ほど聞けば、彼女は当村三女傑の一人と言われ、共産党員とのことであった。

末弟も三歳のとき母が死亡し、父も小学一年生のと き事故死し、結婚していた二人の弟を除き、我が子三人と六人の弟妹の面倒を見ることになった。貧乏に慣れているとはいえ、貧乏は辛かった。いまま少し早い復員員であったら、もう少しましな仕事にもありつき、収入も多かったものをと悩んだこともあった。しかし、歲月はありがたいもので、悩み苦しみつもすでにそれより五十数年。三年前の心臓手術の予後も順調に、

日常の生活を営みつ、男子の平均年齢をすでに二年も超過したことに感謝しながらの毎日である。

村が合併し市役所職員となったが、五十六歳のとき狭心症発作が起こり、意を決して退職した。年金は至って少額だが、発作もおかげで出なくなつたが、何のかんのと仕事を押しつけられ、勤務中より忙しいではないかと苦笑したこともあった。

退職後二十数年間に、今までの恩返しと、及ばずながら地区の皆様のために少しでもお役に立てたのではないかと、心密かに思っている今日この頃である。

ソ連抑留生活の思い出

三重県 浜口 禎 祐

私達一二一五部隊の将校平岡部隊長、秋本中尉、鹿兒島中尉、近衛中尉、高橋中尉、浜口少尉（私）は、間島延吉に集結。途中、近衛中尉は入ソ。その後、私達は二十五日間貨車に乗り、タートル州のラーダ、エ

ラブカ、カザンと三年間抑留され、昭和二十三年八月、皆一緒にナホトカより元将校も帰った。一日二食のひどい生活だったが、苦勞した思い出は忘れ去って、面白かった事のみが思い出される。

一 ラーダでの思い出

五、六人でコンボーイと共にチョルニー（ステンカラージンの歌で有名な所）にケロシン（石油）を買いに行った時の話。コンボーイにタバコをやって映画を見に連れて行ってもらったところが、「一人当たり五ルーブル出せ」と言われたので「給料が十ルーブルですので五ルーブルは出せない。何とかしてくれ」と頼んだら無料で入場する事が出来た。ところがフランス映画を見ている客が「これは日本語か」と私に尋ねたので、「これはフランス語だ」と言ったら「日本人は学問をしているのだな」と感心していた。「映画がはねたら私の家に来てくれ」と言ったが、それには行けなかった。私は映画の途中で便所に行きたくなかったの、便所へ行って隣の部屋を覗いたところ、ダンスをやっていた。「教えてくれ」と言ったら、親切に手を

取って教えてくれた。個人的には親切。

二 エラブカでの思い出

森林伐採の作業で、三人一組で十二立方メートルのノルマ。腹が減っていてとても出来ない。それで二人がコルホーズへジャガイモ取り、他の者は昨日伐った木材（長さ四メートル）を転がして本日の成果にする。後で分かって焼き印を押された。そこで焼き印を削る。また一方ジャガイモ取りは、マンドリンで撃たれて山林の中に入る。道に迷ってどうにもならなくなった。もう野宿するかと決心していた時、神の助けで連絡船の汽笛の音がしたので、川が近いぞと思って川辺に行き、川の流れを見て上流へ歩いて行ったら皆が待っていた。その時、他の組の者と二人で行ったのだが、お互い枕カバリーにジャガイモをしっかり持っていたのには、苦笑いせざるを得なかった。

三 カザンでの思い出

私も一時、作業班の通訳をしていたことがある。私が作業員に「この煉瓦を壊せ」と通訳したら、ナチャーニックが怒って「運べ」と言った。私はまだ口

シア語が下手だったから「ゆっくり言ってくれ」と頼むと、親切にゆっくり言ってくれたのでその後事なきを得た。

その作業場での私の日課は、皆（十人ぐらい）のパンを買いに行くことだった。ある日、夕方作業が終わる前にパンを買いに行った。そこは配給所だったが、私が一番後ろに並んでいたら、「ヤボンスキー」と言っで手で招くので窓口へ行ったところ、「パンが欲しいか」と言うので「腹が減ってペコペコ」と言ったら、五、六人分のパンをくれて窓を閉め、「本日は終了」と言っで窓口を閉めた。他のソ連人は「アリャアリャ」と言っでいた。

ドクターになった話

当時、伐採所では日曜は休みだった。私達も外出しある家へ行き、パンと石鹼を交換していたが、その時ちょうど病人がいた。「どれ、見てあげましょう」と額に手を当てたら熱い。「水で冷やしなさい」と言っで別れようとしたら「日本のドクター有り難う」とジャガイモをバケツに一杯くれた。ところがその次の

日曜日に行ったところ、「ちょうど良い時に来てくれた」と怪我人を連れて来たので、驚いて私は「ズバドクター（歯医者）だ、今度友達のだクターを連れて来る」と言っで逃げたが、冷や汗ものだった。

コルホーズでの思い出

コルホーズでは農婦と一緒に仕事をした。農婦は良く働いた。そして良く歌を歌い、仕事が終わればダンス。共産主義なので、その日その日を楽しむ生活だ。今でも「カチューシャ」の歌、「ステンカラージン」の歌等を口ずさんでいる。あのボルショイの腕、体が眼にちらつく。私の体を抱えに来た感覚が忘れられないが、遠い夢となった。

三年間の収容所生活は、確かに苦労があった。朝起きると隣りの戦友が起きて来ない。死んでいた。それでシラミや南京虫が私の体に寄って来た訳がわかった次第。彼らは生き血しか吸わない。色々の苦労はどういう訳か忘れたが、あの当時の苦労が精神的な財産となって私を支えているように思う。

【執筆者の紹介】

大正八年十二月一日、三重県伊勢市に生まれる。農業を生業とする両親に育まれ、長男の夭折のため、次男ではあったが家（親）を見る責任を感じておられた。

学歴 旧制県立宇治山田巾中学校卒業

旧制三重高等農林専門学校土木科卒業（現在の三重大学）

職歴 昭和十六年四月一日、台湾総督府土木局

軍歴 昭和十六年、徴集にて、昭和十七年四月一

日、広島県宇品港集合、満州国ヘルピン市郊外阿城県にある阿城重砲兵連隊に入隊したが、関特演により改編され、新たに重砲兵第三連隊（通称名 満州第一二一五部隊）を創設、駐屯地も東満の下城子東方高地に移駐する。

浜口さんは、体は頑健、頭脳明晰で、砲兵として典型的な方だったが、父君が往年、近衛騎兵として日露戦争青島戦（第一次世界大戦）に御活躍され、父子二代に亘って国家の干城として御奉公出来たことを胸の

裡に絶えず誇りとして持っておられた由を承っている。初年兵として一期の検閲まで一中隊に籍を置きながら、内務に練兵に活躍され、甲種幹部候補生として横須賀市馬堀の陸軍重砲兵学校にて八カ月の猛訓練を受け、鍛えに鍛えられ、晴れの見習士官となつたかき原隊に帰られた。同期の何人かと卒業したが、原隊に帰任することが出来た優秀な見習士官は、浜口さんほか四人と聞かされている。

帰隊後は、卓越した技術の持ち主として弾列中隊にて営門（正門）前の橋梁の設計（重量積載車両の通過）と陣地の洞窟備砲など、資材不足の中、鋭意、弾列中隊の責任を総力で発揮したが、終戦となり火砲の威力を示すことはなかった。

シベリアの三年の苦難の時は流れて、昭和二十三年八月、九死に一生を得て故郷伊勢へ戻っては来たが、さすがに往年の頑健な体も長期の重労働のため衰弱し、一年近くも静養された。

昭和二十四年九月、体力がようやく回復して建設会社に入社され、七年近く現場監督や現場所長を歴任さ

れたが、決する所あり、独立のため退職。時に昭和三十一年、裸一貫、シベリア時代の労苦を偲び一心不乱、無我夢中にて働き続け、ようやく人並みになり、気のついた時には三重県でも中堅企業の一つに仲間入りされていた。

(愛媛県 山本 繁夫)

シベリアの英霊に思う

愛媛県 三好 清一

昭和二十年十月七日、私はコムソリスクからアムール河を渡り、約一昼夜の後、とある山あいの線路傍に下ろされ、初雪のあとと思われる山道を少し登った先の収容所に入った。

その日より遡ること二カ月、八月七日頃であったか、私たち重砲第一二一五部隊の新兵数名は、凶門の近くの川原で砂利の採集をしていた。小休止があり、ふと空を見上げたとき、もはや我が国にはないものと

思っていた四発の重爆が(実はソ連機であったが)悠々と飛んでいったのを今も忘れることが出来ない。その直後のことラッパが鳴り渡り、中隊のトラックが私たちを拾いにやって来た。

「あのラッパは内地転属かも知れんぞ」などともない、平和な大日本帝国陸軍は急転直下戦闘状態に入り、不眠不休の大砲据え付けは一応完了したものの、当方の状況を知り尽くした敵方は、虎の子の二四榴弾チヂの背後を突いて来たのである。「背に腹はかえれぬ」、今晚斬込みと覚悟を決めたのが八月十五日の昼前であった。身を清めて夕暮れを待つうちに、幸い終戦の無電が入ったのである。

その日から丸腰で目的を失った敗残の兵は、惨めな姿をさらけ出して凶門・延吉と転々し、二〇〇キロ行軍という苦しく長い、しかも一日一袋半の乾パンでの行軍を強いられたのである。その間、激戦のあった陣春を通ったとき、敵戦車のひっくり返っているすぐそばには必ず日本兵の屍が膨れ上がって腐臭を放っており、思わず逃げる自分の冷たい心に、戦死者への申し